OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	標準日本語のアクセントの逸脱に対する違和感について : 4拍語の和語および外来語の名詞を対象に
Author(s)	韓, 喜善; 難波, 康治; 陳, 曦
Citation	大阪大学国際機構研究論集. 2026, 30, p. 29-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/104086
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

標準日本語のアクセントの逸脱に対する違和感について

── 4拍語の和語および外来語の名詞を対象に ──

韓　喜善*・難波　康治†・陳　曦‡

要　旨

本研究は、標準日本語母語話者を対象に、4モーラ名詞のアクセントが逸脱した際に生じる違和感の影響を検証したものである。実験の結果、以下の点が明らかになった。(1)語種による影響は認められなかった。(2)第1・第2モーラ間でピッチが反転した場合、とりわけ本来「頭高型」ではない語が「頭高型」で発音されると違和感が強まる。(3)「平板型」の語が「尾高型」に変化する場合は、「尾高型」の語が「平板型」に変化する場合と比べて違和感が顕著である。(4)「中高型」アクセントタイプ（LHLL：-3、LHHL：-2）への変化については、中高型ではない語が中高型に変化すると不自然と判断される。一方、本来-3の語が-2になると違和感があるが、本来-2の語が-3になっても、アクセントによる影響が認められない場合がある。(5)-3アクセントの受容性は隣接するアクセントタイプに限定され、すべてのアクセントに拡張できるわけではない。(6)第1・第2モーラがともに「低低」となる場合、違和感は強い。(7)音節構造、特に特殊拍の有無やその位置も違和感に影響する可能性が示唆される。

【キーワード】日本語、アクセント、名詞、語種、逸脱、違和感、4モーラ

1　はじめに

日本語のアクセントの機能としては、語の弁別や統語機能（境界表示機能）が挙げられる。しかし、語の弁別については中国語（71%）に比べると標準日本語の語の弁別機能（14%）は低いことが知られている（柴田・柴田 1990）。また、実際にはアクセントの異なる方言話者同士の会話において、アクセントが一致せず異なっていても、文脈に助けられて話し手の意図が聞き手に伝わる場合がしばしばあることから、アクセントによる語の弁別が常に有効であるとは言えない。しかしながら、語のアクセントが異なると聞き手に違和感を与えるという報告があり（角道 1990、郡 2019）、アクセントが担う機能については、むしろそれが方言らしさを印象付けたり、自然さを決定したりするという側面に注目する必要がある。日本語の学習者がアクセントを学習する動機としては、話し手として聞き手に違和感を与えたくないという心理が大きく働いているのではないだろうか。しかしながら、アクセントは語ごとに恣意的に決まっているため、学習者はアクセントを個別に覚えなければならず、アクセントの学習は負担が大きいことが知られている（上野 1996）。また、「アクセントの誤り」と一言で言っても漠然としたものであるため、アクセントの誤りに対しては違和感の程度や許容度など具体的なデータを提示する必要がある。本稿では、アクセントに対する違和感とはどのようなものなのかを明らかにする第一歩として、標準日本語母語話者を対象に4拍語の名詞におけるアクセント核のずれの影響を調査し、アクセントの

* 大阪樟蔭女子大学学芸学部准教授
† 大阪大学国際教育交流センター准教授
‡ 早稲田大学商学学術院講師

逸脱に対する違和感やその許容度について検討する。

2　先行研究

アクセントの逸脱に関する実験音声学的検討については、崔（2003）、梁（2015）、郡（2019）の研究がある。そのうち、郡（2019）は標準日本語で生成された日本語母語話者の著者本人による2拍と3拍の語について、本来と異なるアクセント型に変更した刺激音を首都圏の日本語母語話者に聞かせて自然度を判定させた結果、特に頭高型と尾高型、頭高型と平板型に関しては相互のアクセント型が入れ替わった場合に不自然さが際立っていたと報告している。この結果については、合成音声による日本語の刺激音に対する標準日本語話者の評価（崔 2003）と中国語母語話者による日本語の音声に対する標準日本語話者の評価（梁 2015）においても同様の結果が得られている。また、郡（2019）は、アクセントの逸脱による違和感を検討する際には、品詞（名詞か動詞か形容詞か）、特殊拍を含むか否かの音節構造、アクセントの変化の途上にある語における旧式か新式か、ミニマルペアを持つ語においては相対的な頻用語かどうか、文環境の影響など様々な要素を考慮すべきであると述べている。その他、地名など日常的で身近な語であれば、アクセントの逸脱による違和感はさらに大きく、語の馴染み度によってアクセントの逸脱に対する判断に影響があることも示した。人名については、検討はされていないものの、馴染みのある人名のアクセントを誤った場合には違和感が特に大きいと述べている。なお、アクセント型の分布は「語の長さ」や「語種」によって異なることが知られており（『新明解日本語アクセント辞典』2014、田中・窪薗 1999）、母音の無声化によるアクセント核の移動といった「母音の広狭」の影響、ピッチアクセントの方言同士であっても高さに対する解釈や感じ方（敏感さ）に違いがあるという見解がある（川上 1995、杉藤 2012a, b）。このように、アクセントの逸脱に関する研究については、上記の要因を統制しないまま大まかなカテゴリーで単純に扱えば、信頼できる結果は得られない。そこで本研究では、上記の要因を考慮しつつ、4拍語の名詞を対象にアクセントの逸脱による違和感への影響の検討を行う。前回の調査（韓・難波・陳 2023）では和語について報告したが、本稿ではさらに外来語を加えて総合的な検討を行う。

3　実験の手順

3-1　テスト語と刺激音

調査で採用した4拍語の名詞のテスト語一覧を表1に提示する。和語は24語で、そのうち頭高型が6語、中高型が8語（-3：6語、-2：2語）、尾高型が3語、平板型が7語である。外来語は10語で、そのうち頭高型が4語、中高型（-3）が2語、平板型が4語である[1)]。日常的な名詞のうち、地名や人名といった固有名詞も含めて検討を行う[2)]。なるべく一つの形態素で形成された和語ないし日常的な語で一つの形態素として認知されている語（例. ひまわり）を検討対象とした。基本的に軽音節が続く語を採用したが、特殊拍を含む語、すなわち長母音、撥音、二重母音を含む語（たましい、おおいた、おとうと、いもうと、えんどう、あいさつ、さいたま、うぐいす、ついたち）も含まれる[3)]。母音の無声化を避けるため、/i, u/の母音が無声子音の間に来る語は採用しなかった。「無声子音＋ / i, u/」が語の最後の音節に置かれる語（ついたち、あいさつ、うぐいす、むらさき、ともだち、コスモス、シラバス、ビジネス、ティラミス、ブラウス）もテスト語に含まれるが、有声音から始まるキャリア文に埋め込んだため、収録された音声は無声化していなかった。キャリア文は、「（テスト語）です」「（テスト語）があります / います」「（テスト語）にいます」のいずれかである。各テスト語を、「頭高型」「中高型（-3）」「中高型（-2）」「尾高型」「平板型」「低低高低」の6種類のアクセント型で生成した。このうち、「低低高低」については馴染みのないアクセントに対する違和感、たとえば京阪式アクセントの「手袋（低低高低）」のように上がり目のタイミングが異なるアクセントに対する首都圏の母語話者の判断も検討に加え、これまであまり検討されてこなかった上がり目の関与についても検討することにした。標準日本語音声の訓練を受け、それを正確に生成できる日本語母語話者に音声を提供してもらった。以上の検討の結果、計204個（34語×6種類のアクセントパターン）の刺激音を作成した。

3-2　刺激音の判断の仕方

聴取者としての実験参加者は、東京都、神奈川県、

表1．テスト語の一覧

アクセント型	和語			外来語	
	普通名詞	固有名詞		普通名詞	固有名詞
		人名	地名		
頭高（-4）	かまきり あいさつ たましい	えんどう	さいたま おおいた	コスモス シラバス ビジネス ティラミス	
中高（-3）	おにぎり ひまわり むらさき うぐいす		あおもり おかやま	ブラウス トラブル	
中高（-2）	かみなり みずうみ				
尾高（-1）	ついたち いもうと おとうと				
平板（0）	ともだち にわとり かささぎ	なかむら	よこはま とよなか はびきの	ステレオ イラスト	アメリカ ブラジル

埼玉県、千葉県出身で首都圏における母語話者19名（20～50代）である[4)]。これらの参加者に音声を聞いてもらい、「自然」「やや自然」「やや不自然」「不自然」の4段階で判断してもらった。参加者から納得できる回答を得るために、あえて刺激音の判断に時間設定をせずに、各音声は繰り返し何度も聞けるように設定した。実験は4回に分けて行われ、各セクションの間の休憩を含め所要時間は3時間程度である。

4　結果と分析

実験の結果を図1～12にて提示する。グラフの縦軸には刺激音に対して感じられた違和感の回答の平均を％で提示した。音声の評価を積み上げ縦棒の形式で示し、凡例の黒は「不自然」、灰色は「やや不自然」、白地の模様は「やや自然」、白は「自然」を表す。図1～8においては横軸に刺激音のアクセント型を示す。図9～12においては横軸にテスト語を提示する。

全体的な傾向を調べるために、「4.1」では音節構造による分類はせず、テスト語の本来のアクセント型にのみ分けてアクセント核のずれによる違和感を検討した。音節構造による影響については、「4.2」にて報告する。

4-1　全体の傾向

刺激音は、和語、外来語それぞれについて語の本来のアクセント型ごとに分類し、分類した各グループ内でアクセントの変更を行った刺激音に対する聴取者の回答を従属変数とする対応のある一元配置の分散分析（有意水準：$p=0.05$）を行った。

その結果、すべてのアクセントのグループ（頭高型、中高型（-3）、中高型（-2）、尾高型、平板型）において刺激音間で有意差が認められた（$p<0.001$）。そのため、刺激音間のすべての組み合わせについてBenjamini and Hochberg法による多重比較（$q=0.003$）を行った。その結果、全体的な傾向として、語種（和語、外来語）に関わらず、アクセントの下がり目が本来の位置から前後へとずれるほど違和感（「不自然」および「やや不自然」との回答）も大きくなっており、和語、外来語とも同様の傾向が見られた。以下、具体的に4つの視点から分析した結果を述べる。

4-1-1　1拍目と2拍目においてピッチが逆転する場合

頭高（-4）を頭高型ではないアクセント型（-3、-2、-1、0）に変えた場合（図1、図2）、違和感が大きくなることが認められた（$p<0.001$）。この逆のパターンとして、中高型（-3、-2）、尾高型（-1）、平板型（0）のいずれかのアクセント型において頭高（-4）になると、「不自然」および「やや不自然」との回答はほぼ100％に達し（図3～図8）、違和感が大きいことが認められた（$p<0.001$）。これらの結果は、先行研究（郡 2019、崔 2003、梁 2015）と一

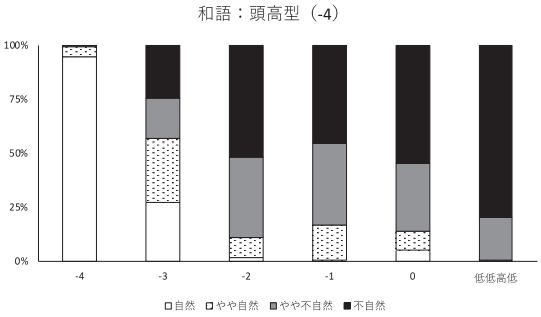

図 1．頭高型（－4）和語名詞のアクセント逸脱の結果

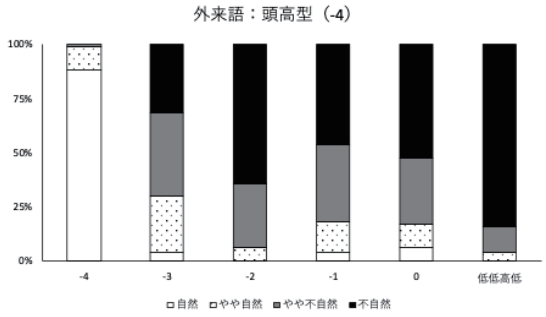

図 2．頭高型（－4）外来語名詞のアクセント逸脱の結果

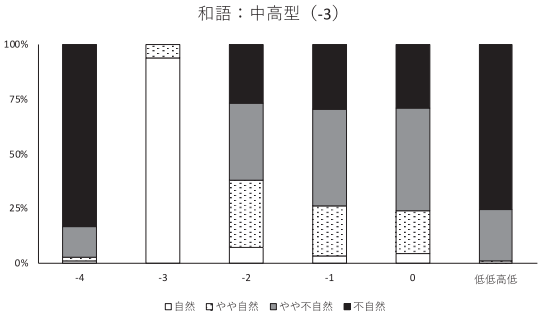

図 3．中高型（－3）和語名詞のアクセント逸脱の結果

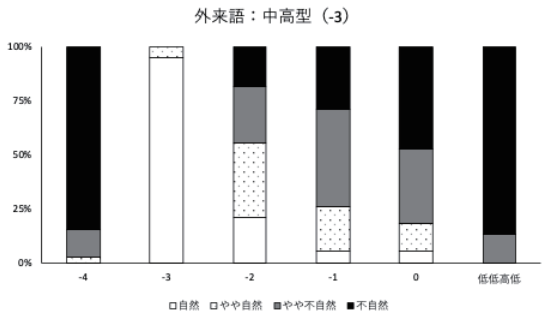

図 4．中高型（－3）外来語名詞のアクセント逸脱の結果

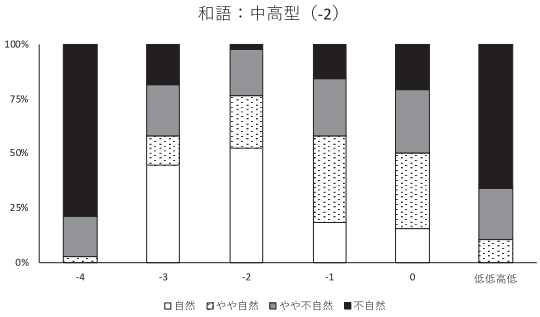

図 5．中高型（－2）和語名詞のアクセント逸脱の結果

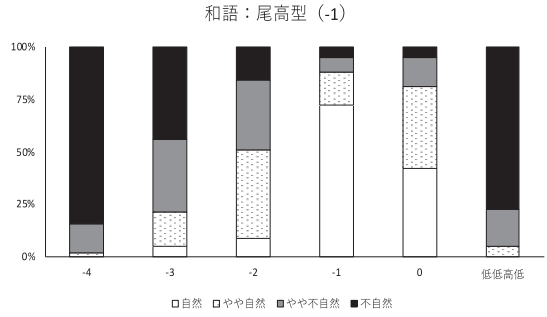

図 6．尾高型（－1）和語名詞のアクセント逸脱の結果

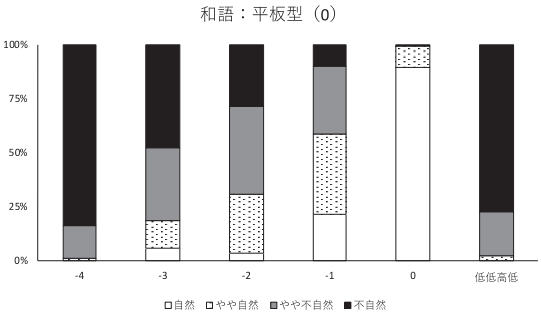

図 7．平板型（0）和語名詞のアクセント逸脱の結果

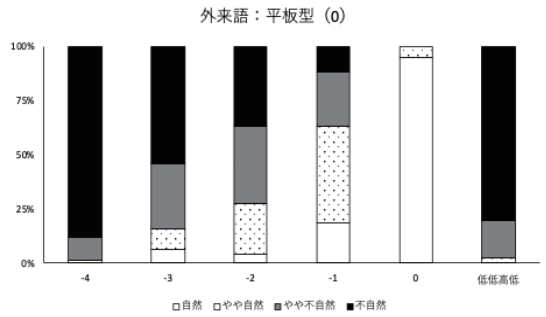

図 8．平板型（0）外来語名詞のアクセント逸脱の結果

致する。このように、特に語の1拍目と2拍目においてはその高低が逆になると、違和感が大きくなることが4拍語においても示された。

4-1-2　尾高型と平板型の入れ替え

尾高型と平板型のアクセントの入れ替えについては、本研究においても先行研究（郡 2019、梁 2015）と同様、他のアクセントの入れ替えに比べて相対的に違和感が少なかった（表2）。ただし本研究では、尾高型が平板型になった場合（図6）は19%（やや不自然：14%、不自然：5%）と比較的違和感が小さかったのに対し、平板型が尾高型になった場合、図7のように違和感は42%（やや不自然：32%、不自然：10%）で小さいとは言えず、尾高型と平板型のアクセントの入れ替えの方向によって違和感を感じる割合に差があった。本研究の結果は、郡（2019）の3拍語の結果と一致するものの、2拍語の場合、郡（2019）と梁（2015）では尾高型と平板型のアクセントの入れ替えの方向に違和感の差がないことが示されており、語の長さによって傾向が異なることがわかる。さらに、相澤（1996）によると、語が長くなるほど尾高型の衰退と尾高型の平板型化の進行が観察されると報告されており、本研究の結果でもそれを支持する結果を得た。

4-1-3　中高型への入れ替え

中高型ではないアクセント、すなわち頭高型（-4）（図1と図2）、尾高型（-1）（図6）、平板型（0）（図7、図8）を中高型アクセント（-3および-2）に入れ替えると違和感があることが認められた（-3：$p<0.001$、-2：$p<0.001$）。郡（2019）によると3拍語では尾高型が中高型になる場合においても違和感は相対的に大きくないという結果だったが、本研究では違和感が強い傾向を示しており、3拍語と4拍語とではアクセントの逸脱の傾向に異なる部分がある。

和語の-2と-3の中高型のアクセントの入れ替えについては、本来-3の語が-2になると違和感がある（$p<0.001$）（図3）という結果であったが、本来-2の語が-3になっても（図5）、アクセントによる影響は認められなかった（$p=0.402$）。これには、アクセント型の割合の差が影響している可能性がある。桑本（2024）によると、4モーラ語の名詞に占めるアクセント型の割合は、-3では12.18%、-2では6.37%であり、外来語だとその差はより大きい（-3：25.53%、-2：2.46%）という。すなわち、より多くの語が示すアクセント型への変化のほうが違和感が少なく、受け入れているものと解釈できる。

4-1-4　-3の生産性について

「-3」は4音節以上の長い語では生産性があるという指摘がある（『新明解日本語アクセント辞典』2014、窪薗・太田1998、窪薗1999）。そこで、各アクセントが-3へとアクセント核がずれた場合、-3になっても特に違和感が少ないかどうか、すなわち-3の受け入れ（「自然」と「やや自然」の合計）を調査した。表3に示すように、和語と外来語に分け、全てのテスト語に対して「自然」および「やや自然」とされた回答の割合をアクセント型に分けて提示する。検討の結果、-3の直前（-4）か直後（-2）のアクセントに関しては、-3にアクセント核がずれると和語では57%（-4）、58%（-2）のように半数以上の割合で受け入れられている。ところが、-1と0では-3へとアクセント核がずれるとそれほど支持が得られていない。このように、4音節語における-3の受け入れはあくまで-3の近隣のアクセントに限ったもので、すべてのアクセントについて受け入れられるものではないことがわかった。

4-1-5　1拍目と2拍目の両方が「低低」の場合

いずれのアクセント型の語においても、「低低高

表2．平板型（0）になった時の受け入れ度（%）

	和語		外来語	
	自然	やや自然	自然	やや自然
-4→0	5	9	7	11
-3→0	4	19	5	13
-2→0	16	34		
-1→0	36	38		
0	90	10	95	5

表3．-3になった時の受け入れ度（%）

	和語		外来語	
	自然	やや自然	自然	やや自然
-4→-3	27	30	4	26
-3	94	6	95	5
-2→-3	45	13		
-1→-3	5	17		
0→-3	6	13	7	9

低」というアクセントにはほぼ100％違和感を覚えるという結果となり（図１～図8）、統計上も違和感があることが認められた（p＜ 0.001）。「低高高低」という下がり目が－２の刺激音と比べると、上がり目のずれによる違和感への影響のほうが大きいことは明らかである（「低高高低」と「低低高低」との比較：p＜0.001）。

このように、上がり目の位置がずれると、標準日本語では語の自然度が低くなることを表す。このことから、標準日本語話者が考える標準日本語らしいアクセントについては、下がり目だけでなく上がり目の情報も重要であることが示された。下がり目だけを表記してある教材や辞書があるが、特に標準語の学習という点については、上り目の情報の提示も不可欠であると言える。上がり目については、語のアクセントとして扱う見方もあり（郡 2004, 2020）、今後さらに検討が必要である。

4-2　音節構造による影響

4-2-1　重軽軽：頭高型（－4）→ 中高型（－3）

頭高型の語において、アクセント核が一つずれて中高型（-3）になった場合では、音節構造による影響が見られた。重軽軽の「あいさつ」「さいたま」「おおいた」と重重の「えんどう」の場合、違和感は小さかったが、軽軽軽軽の「かまきり」「コスモス」「シラバス」「ビジネス」「ティラミス」、軽軽重の「たましい」の場合、違和感が大きかった（図9）。これは、１拍目と２拍目に二重母音（/ai/）がある場合、および２拍目に長母音と撥音がある場合には、２拍目に下がり目が置かれても、同一音節内に「アクセント」があるため、それほど違和感は大きくならないと解釈できる。このように、頭高語では、語の最初の音節において特殊拍に下がり目があればそれほど違和感が大きくないことが示され、全体の傾向（4-1-1）とは異なっていた。

4-2-2　軽重軽：中高型（－3）→ 中高型（－2）

一方、軽重軽の「うぐいす」の場合、アクセント核が－３から－２に後ろにずれると、違和感は他の語より大きい（89％）（図10）。これは、上記「4-2-1」の頭高型の語のうち２拍目に特殊拍がある語とは異なる傾向であり、語中の特殊拍の位置によってアクセントの逸脱に対する影響は異なる可能性があることを示唆する。

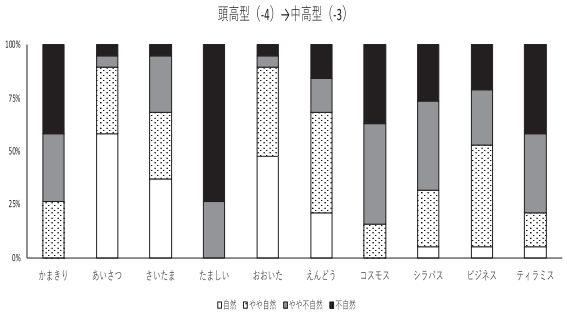

図９．頭高型のテスト語を中高型（－３）に変えた場合

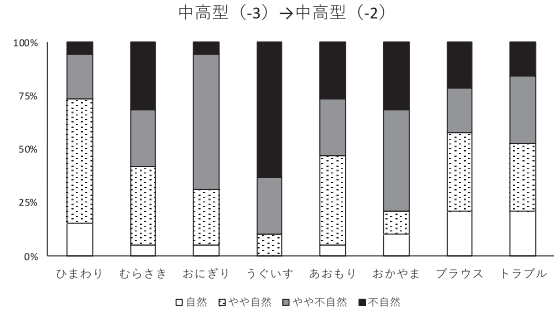

図10．－３の中高型のテスト語を－２の中高型に変えた場合

4-2-3　軽重軽：中高型（－2）→中高型（－3）

「みずうみ」は、「－２」のときより「－３」のほうが違和感が少ないと判断された（図11、図12）。これは、「みずうみ」を「ミズーミ」のように長母音として捉えており、アクセント核が特殊拍（長母音）からその前へ一つずれたアクセントのほうがより自然だと感じている可能性がある

『明解日本語アクセント辞典』（1981）、『NHK 日本語発音アクセント辞典』（1998）、『新明解日本語アクセント辞典』（2010, 2014）では、「みずうみ」のアクセントは「－２」と記載されているが、より新しい『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）では、「みずうみ」のアクセントは「－２」と「－３」の両方が記載されている。少なくとも「みずうみ」に関しては、旧式（-2）より新式（-3）のほうが自然なアクセントとして支持されており、今後、アクセントの変化についてもさらなる検討が必要であることが示された。

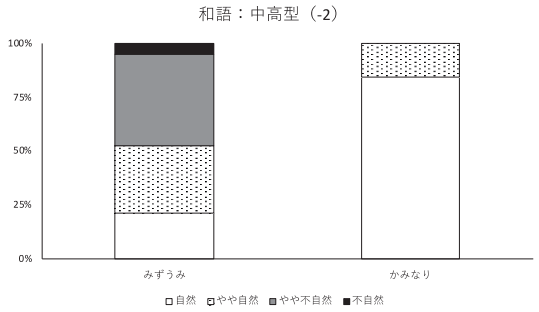

図11. －2の中高型のテスト語

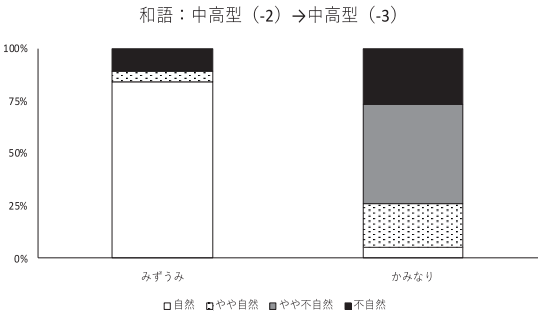

図12. －2の中高型のテスト語を－3の中高型に変えた場合

5　結論

本研究では、首都圏在住の標準日本語母語話者を対象に、標準日本語の4拍の和語および外来語名詞の印象について、アクセントの逸脱による影響を調査した。実験の結果、語種に関わらず、外来語のテスト語は和語の結果（韓・難波・陳 2023）である以下の5点を支持するものであった。(1) 本来頭高型ではないアクセントを頭高型で生成された音声については違和感が大きかった。(2) 尾高型と平板型の入れ替えについては、他のアクセントの入れ替えに比べて相対的に違和感が少ないが、尾高型が平板型になった場合より平板型が尾高型になった場合の違和感のほうが大きい。(3) 中高型への入れ替えについては、中高型以外のアクセントが中高型になると不自然に感じる。ただし、－2と－3の中高型のアクセントの入れ替えについては、本来－3の語が－2になると違和感があるが、本来－2の語が－3になっても、アクセントによる影響が認められない場合がある。(4)「低低」の音調で始まるアクセントには違和感が大きく、上がり目の情報も重要である。(5) アクセントに対する違和感は特殊拍を含むか否かという音節構造の関与がみられるとともに、語内における特殊拍の位置によって違和感も変わる可能性がある。

一方、今回の実験からは、－3の受け入れがあくまで－3の近隣のアクセントに限ったもので、すべてのアクセントについて受け入れられるものではないことが示唆された。

ただし、本研究で採用したテスト語は日常的で身近な語であるため、それが原因で外来語も和語と同様の結果を得た可能性がある（井上 1998）。外来語の馴染み度によってアクセントの逸脱による影響も変わる可能性がある。

注

1） 中高型（－2）と尾高型（－1）を採用していない理由は、そもそも尾高型（－1）は存在しないことや中高型（－2）は2.46％で非常に少ないことが報告されているためである（桑本 2024）。桑本（2024）は『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）から4拍語を抜き出し、品詞ごとに分類し、アクセントの分布について調査した。名詞については、語種にかかわらず全体の傾向として頭高型（－4）が8.80％、中高型（－3）が12.18％、中高型（－2）が6.37％、尾高型（－1）が0.65％、平板型（0）が72.10％である。一方、外来語に関しては、頭高型（－4）が43.38％と最も多く、平板型（0）が28.52％、中高型（－3）が25.53％の順で頻度が下がるが、中高型（－2）は2.46％で非常に少なく、尾高型（－1）は0％で存在しないという結果であり、全体と外来語ではアクセント型における分布は異なる。

2） 人名のうち、「遠藤」については漢字の音読みの語であるが、馴染みのある頭高型アクセントの人名として採用した。「豊中」と「羽曳野」は大阪の地名であり、これらの地名は、現地では「高高高高」のアクセントで発音されているが、『NHK 日本語発音アクセント新辞典』（2016）では平板型との表記が見られるため、平板型として扱う。

3） 二重母音については、窪薗・太田（1998）の見解に従う。

4）「首都圏」とは、東京都（島嶼部を除く）、埼玉県、千葉県、神奈川県を指す。実験参加者は、この1都3県で言語形成期を過ごし、現在も首都圏に在住している日本語母語話者のことである。19名の実験参加者のうち、18名は20～30代だが、1名だけ50代の参加者が含まれる。両世代において世代差による差はなかった。

参考文献

相澤正夫　1996「語の長さとアクセント変化――『東京語アクセント資料』の分析――」『国立国語研究所

研究報告集』17，pp.181–237.
秋永一枝（編）1981『明解日本語アクセント辞典 第二版』，三省堂.
秋永一枝（編）2010『新明解日本語アクセント辞典 CD付き』，三省堂.
秋永一枝（編）2014『新明解日本語アクセント辞典 第2版 CD付き』，三省堂.
井上史雄　1998『日本語ウォッチング』，岩波新書.
上野善道　1996「アクセント研究の展望」『音声研究』211，pp.27–34.
NHK放送文化研究所（編）1998『NHK日本語発音アクセント辞典』，NHK出版.
NHK放送文化研究所（編）2016『NHK日本語発音アクセント新辞典』，NHK出版.
角道正佳　1990「第30回外国人による日本語弁論大会予選通過者の日本語の東京アクセントからの逸脱度」『音声言語』Ⅳ，pp.137–154.
川上蓁　1995『日本語アクセント論集』汲古書院.
窪薗晴夫　1999『日本語の音声』，岩波書店.
窪薗晴夫・太田聡　1998『音節構造とアクセント』，研究社出版.
桑本裕二　2024「外来語4モーラ名詞のアクセント分布についての標準語と鳥取県倉吉市方言の対応状況について」『PAIK2024年1月月例会配布資料』.
郡史郎　2004『東京アクセントの特徴再考』国語学55(2)，pp.16–31.
郡史郎　2019「アクセントとイントネーションの逸脱に対して感じる違和感について」『言語文化共同研究プロジェクト2018』，pp.17–28.
郡史郎　2020『日本語のイントネーション――しくみと音読・朗読への応用――』，大修館書店.
柴田武・柴田里程 1990「アクセントは同音語をどの程度弁別しうるか――日本語・英語・中国語の場合――」『計量国語学』17，pp.317–327.
杉藤美代子　2012a『日本語のアクセント、英語のアクセント どこがどう違うのか』，ひつじ書房.
杉藤美代子　2012b「アクセントの生成と知覚における個人差と方言差」『花と鼻』，和泉書院.
田中真一・窪薗晴夫 1999『日本語の発音教室――理論と練習――』，くろしお出版.
崔壯源　2003「日本語らしさの許容度の実態調査：アクセント核のズレが影響する日本語らしさ」『第17回日本音声学会全国大会予稿集』，pp.213–218.
梁辰　2015「アクセントの誤用パタンが自然度評価に与える影響の比較」『第29回日本音声学会全国大会予稿集』，pp.122–127.
韓喜善・難波康治・陳曦　2023「標準日本語のアクセントの逸脱に対する違和感について：4拍語の名詞を対象として」『多文化社会と留学生交流：大阪大学国際教育交流センター研究論集』27，pp.19–26.

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究C、課題番号：22K00529、研究代表者：韓喜善）の助成を受けて行ったものである。

Abstract

On the Perception of Incongruity in Accent Deviations from Standard Japanese:

A Study of Four-Mora Nouns in Native Japanese Words and Loanwords

HAN, Heesun
NAMBA, Koji
CHEN, Xi

This study examines the effects of accent deviation on the perception of incongruity in four-mora nouns among native speakers of standard Japanese. The results showed no effect of lexical categories in Japanese. The experimental results reveal several key findings: (1) A greater sense of incongruity occurs when the pitch is reversed between the first and second morae, particularly when a word that is not originally of the “head-high” (HLLL,-4) type is pronounced with a “non-head-high” accent. (2) The incongruity is more pronounced when a “flat” (LHHH, 0) type word is transformed into a “tail-high” (LHHH,-1) type, compared to when a “tail-high” word is transformed into a “flat” type. (3) With respect to transformations into the “middle-high” (LHLL,-3 / LHHL,-2) accent type, the findings indicate that non-“middle-high” accents transformed into the “middle-high” type are perceived as unnatural. (4) The acceptability of the-3 accent is restricted to adjacent accent types and does not extend to all accents. (5) When both the first and second morae are “low-low,” the perception of incongruity becomes significantly heightened. (6) Furthermore, the syllable structure, particularly the presence and positioning of special morae, also influences the degree of perceived incongruity.